

議事録:第2回 出雲崎町立学校の在り方検討委員会

日時： 令和8年3月18日（水） 午後6時30分～午後8時10分

会場： 出雲崎町中央公民館 講堂

参加者： 委員14名全員、教育長、事務局

1 開会

2 委員長あいさつ

午後から、小・中学校をはじめとした公共施設を視察しました。中学校校歌の歌詞の長さや立派な中庭、小学校の新しい木造校舎、どの施設にも様々な絵画が飾られていました。豊かな時間を過ごすとともに、出雲崎の歴史と文化を感じることができました。

これまで出雲崎が蓄えてきた自然、歴史、文化的な財産を、学校づくりの資源として生かし、皆さんの議論の中で話題にしてもらいたいと思います。今日は皆さんの思いを存分に出し合える時間が設定されています。皆さんと意見を交わしながら、私自身もこれからの出雲崎の学校の在り方を考えていきたいと思っています。

3 協議事項 副委員長が議長を務める

(1) 第1回検討委員会の振り返り

- 事務局が議事録を基に内容を確認 → 質問、意見はなし

(2) 出雲崎町の特色を生かした教育の推進について

- 本会議のテーマについて（教育長）：資料に基づき、「これからの学校教育に求められるもの」、出雲崎町の学校支援地域本部事業の取組等について説明

議論を進めていく上での前提

学校は子どもたちを育む「教育の場」であることを大前提として、まず「子どもたちにどのような学びをさせてあげたいか」という学びの環境改善を議論の出発点とする。

これからの学校教育に求められるもの（資料1-1）

文部科学省が定める「学習指導要領」をベースに、現在および未来を展望した教育の在り方を提示。全国一律のカリキュラムの基準を押さえつつ、出雲崎町が現在、取り組んでいる事業を示している。

出雲崎町の学校支援地域本部事業（資料 1-2）

三位一体の教育：学校・家庭・地域が一体となり、地域の特色を活かして子どもたちの学びを豊かにする教育を推進している。その中核となるのが本事業である。

小規模校のメリット最大化：地域住民の協力を得ることで、異年齢の多様な考えとふれあう機会を創出する。これは小規模校のデメリットを緩和し、メリットを最大化する有効な策である。

郷土愛の醸成：小学1年生から中学3年生まで、地域の人とかかわりながら、歴史や伝統文化を段階的に学ぶことで、「ふるさとへの愛着と誇り」を育むことができる。

議論の土台としての「理念」

建設的な議論を進めるためには、「目指すものはこれだ」と立ち戻れる場所（理念・目標）を持つことが必要であると委員長も示されている。本日は委員それぞれの立場から、夢や思いを忌憚なく出し合ってほしい。

● A 委員より質問

本委員会のゴールはどこになるのか：この会がどこを目指しているのか分からない。第1回は「建物の造り」にフォーカスしていたが、今回は「教育の質」の話になっている。「学校を建て直すかどうか」から議論を始めるのか、それとも「建物はこんな感じがいい」というような質の話だけで終わらせるのか。

懸念事項：よい建物を作っても、立地が悪ければ人は集まらない。また、隣接する市町村がより新しくよい学校をつくれれば、そちらに流れてしまうのではないか。この検討委員会がどこに着地しようとしているのか、どんな気持ちで臨めばよいのか、その方向性を明確に示してほしい。

● 事務局回答

本委員会の目標：まずは「学校をどうするか」を含めた「教育環境の在り方の改善」を目指す。そのためには、具体的な手法（ハード）の前に、「どのような内容を目指すのか」「どのような姿を子どもたちに残したいのか」という目指す姿（内容）を明らかにする必要がある。委員の皆さんからは、その点について意見を出してもらいたい。

段階的な検討プロセス：1年目で「目指すべき学びの姿」を多角的に出し合う。その結果、「学校を残そう」「新しい学校をつくりましょう」という方向性が定まったとしたら、その段階で、それを実現するために「学校をどのような形で残すべきか」という具体的な検討（ハード・制度）に入る。

諮問に基づく進行：本委員会では、「諮問書」に基づき、前回お示しした年間のスケジュールに沿って進めていく予定である。本日はその基盤となる理想の学校像と、それを実現するための制度について議論を進めてもらいたい。

● 議長（副委員長）

今後、議論する中で方向性が見えてくるかと思う。前回、教育長から諮問された内容について、私たちが様々な意見を交わし合いながら、方向性をまとめていくということになる。内容的な面もあれば、施設等のハード面についての提言もあるかと思う。

ただし、最終的に私たちがすべて決定できることではない。あくまでも出雲崎町のこれからの学校の在り方について、私たちとしての意見をまとめあげて、教育委員会にお返しできればと思う。この点を踏まえて協議に参加してもらいたい。

グループ協議①「子どもたちにこんな学びをさせてあげたい」 35分

委員長、副委員長も各グループに入って、協議に参加（協議②も同様）

(3) 出雲崎町の教育の実現を図る教育制度について（資料 No. 2～4）

● 教育長より説明と提案：事前に配付した資料に加え、その場で追加資料 No. 5 を配付。A委員の質問を踏まえて、委員会としての方向性、考え方について提案

- ・現段階では隣接する自治体との連携による共同の学校設置は極めて困難。
- ・学校を残さないということは、町の持続的・発展的な在り方を否定的に捉えることになる。よって、当委員会では「残さない」という前提は妥当ではない。
- ・以上のことから、町として、出雲崎町に愛着をもち、町の発展のために尽くそうとする人材育成を今後も進めていく上でも、学校を設置することを前提に議論を進めていきたいと考えている。このことについて意見があればお願いしたい。

→ 質問・意見なし

● 事務局が資料に基づき、小中連携と小中一貫教育について説明

グループ協議②「出雲崎町にとって、より望ましい教育制度はAかBか」 20分

A 小中連携教育（現在の形）

B 小中一貫教育（9年間の系統的な教育）

(4) 各グループからの発表 15分

■ グループA： 歴史と感性を育み、自律を促す学び

テーマ1：子どもたちにさせたい学び

- **【キーワード】** 歴史の継承（北前船・良寛）、情報発信、自然体験、図書空間
- 出雲崎の誇る歴史や文化を深く学び、それをSNS等のネットワークで町外へ発信できる力を養う。また、海・山・四季を感じる環境での学びを重視し、学校の中心に「未知の世界へ繋がる図書館」を置くことで、子どもがワクワクする学習環境を作りたい。

テーマ2：望ましい教育制度（A案・B案）

- **A案（連携）の視点：** 建物が分かれていることで「中学生になる」という「心の切り替え」や「構え」ができるメリットを評価
- **B案（一貫）の視点：** 9年間を見通した「体系的な学び」や、先生が長期にわたり子どもを見守れる安心感、幅広い年齢層での交流をメリットとして挙げた。

■ グループB： 人間力と「時代が求める学力」の両立

テーマ1：子どもたちにさせたい学び

- **【キーワード】** 自然・伝統、人間力、自己肯定感、国際教育、資格取得（英検・ITパスポート）、防災教育
- 出雲崎ならではの自然・地域の魅力を伝え、伝統芸能などを味わってほしい。子どもを「宝」として尊重し、多様な人との関わりの中で「人間力」と「自己肯定感」を育てる。同時に、オンライン授業等を活用し、近隣市町村に引けを取らない教育を提供。英検やITパスポート、防災士などの資格取得を支援し、実社会で通用する力を付けさせたい。

テーマ2：望ましい教育制度

- **【結論：B案（小中一貫教育）】**
- **理由：** 施設の集約によるコスト削減と、9年間の連続性。「教育エリアの集約」により、成長段階に合わせた質の高い教育を一貫して提供できる点を最良とした。

■ グループC： 地域愛とコミュニケーション力を育む拠点

テーマ1：子どもたちにさせたい学び

- **【キーワード】** 郷土愛（戻ってきたくなる町）、質の高い教育、コミュニケーション力、保育留学
- 大人になっても「戻ってきたい」と思えるよう、地域の祭りや伝統文化の学習、地域行事への参加を重視。出雲崎に住んでいるとこういう教育が受けられ

ることをアピールしていく。学校が行くことが楽しいと感じ、多様な人との交流を重視。出雲崎ならではの教育資源を活かした体験学習を教育の核に据える。自然や文化などをもっと発信していく。

テーマ2：望ましい教育制度

- **【結論：B案（小中一貫教育）を軸とした幼保小中連携】**
- **理由：**給食や財政面の効率化に加え、異年齢交流がもたらす「広い社会経験」を重視
- **独自の提案：**小中の一貫だけでなく、「幼・保・小・中」の11年間の連携が重要。理想は同じ敷地内に保育園・幼稚園も併設し、町全体で子どもを育てる体制

※参考【3グループの発表のまとめ】（事務局）

3グループとも、「出雲崎の豊かな歴史・自然を活かすこと」と、「少人数の課題を克服するための対外的な発信力やコミュニケーションの力」を求めている点が共通していた。

制度面では、9年間の連続性や効率性を重視するB案（小中一貫教育）を推す声が多い一方で、小・中の環境変化がもたらす「精神的な成長」を大切にする視点（A案的側面）も議論された。

(5) 講評 委員長

委員長からは、長時間の熱心な議論に対する謝辞とともに、各グループの発表内容を踏まえた以下の3つの柱と、教育制度に関する専門的な知見が述べられた。

- 「出雲崎らしさ」を教育の力に
教育資源としての活用：各グループから「良寛」「伝統芸能」といったキーワードが挙げたことが評価される。出雲崎の持つ歴史や文化、自然を単なる知識として教えるだけでなく、子どもたちがそれらを自らの誇りとし、外部へ発信していくための「教育資源」としてどう活かすかが議論の核であった。
- 小規模校の課題を「興味・関心」で乗り越える
競争から「共鳴・探究」へ：小規模ゆえに「競争原理」が働きにくいという懸念に対し、それを補うための「ワクワクする図書館」や「ICTの活用」といった提案に注目した。
環境の重要性：知識を詰め込むだけの教室ではなく、子どもたちが自発的に未知の世界とつながり、興味を広げられるような「施設・環境の在り方」が、少人数の課題を解決する鍵になる。
- 共通キーワード「つながる・つながり合う」

孤立を防ぐネットワーク： 質の高い教育、ここにしかない学びを実現するために、発表に共通していた言葉として「つながる（ネットワーク）」が挙げられる。

多様なつながり： 町内だけでなく、デジタル技術（大画面を通じた交流など）や地域の大人、さらには世界と「つながり合う」ことで、少人数であっても多様な考え方に触れ、社会性を育むことができる。この「つながり」をデザインすることが、新時代の学校づくりのキーワードになる。

- **教育制度（小中一貫教育と小中連携教育）についての見解**

専門的視点： 委員長自身の文部科学省等での調査研究の経験を踏まえ、「一貫」と「連携」は二者択一の単純な正解があるわけではない。

メリットと課題の整理： どちらの制度にもメリットと課題があり、それらをどう「料理（運用）」するかが重要。大切なのは、形式（箱）を先に決めることなく、「出雲崎でどのような学びを実現したいか」というビジョンに、どちらの制度がより適合するかを突き詰めること。

今後のプロセス： 本日の議論で出された「目指すべき学びの姿」をベースに、それを実現するために最適な施設環境や制度を、これから時間をかけて検討していく。今回の協議を経て、委員会としてようやくスタートラインに立ったと言える。次回以降についても継続して協議をしていくことが重要である。

4 その他

- 次回の開催についての連絡
- 複式学級のある学校（深沢小）の視察案内

5 閉会